ハーレム水泳部
憧れ美少女と豊満女教師

早瀬真人
挿絵／孤裡精

立ち読み版

KTC
KYU TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　豊満美教師の包茎しゃぶり……4
第二章　美人部長の精液搾り……49
第三章　恍惚と悦楽の逆レイプ……98
第四章　小悪魔少女のパイズリ奉仕……137
第五章　美少女たちの淫裂責め……182
第六章　魅惑のハーレム乱交……221

登場人物 *Characters*

藤木 達郎
（ふじき たつろう）

聖蘭学院に転入した性欲旺盛な童貞の二年生。強豪の水泳部所属で実力を認められていたが、内気な性格のため本来の力を発揮できずにいる。

内田 美久
（うちだ みく）

聖蘭学院二年の水泳部所属で、アイドル並の美少女。黒髪ロングの外見はおっとり文学少女風だが、芯が強くて頑固な一面も持つ。程よい肉付きのバランスの良い体形。

畑山 響子
（はたやま きょうこ）

聖蘭学院の体育教師で水泳部の顧問も務めるグラマー美人。姉御肌な性格で女生徒たちからの信頼が厚い。Ｆカップを超えるバストを持つ。

金本 友希
（かねもと ゆき）

聖蘭学院三年の水泳部部長。セミショートヘアの野性的な美少女。明るく快活で、性にも奔放な性格。スラリとしたスレンダー体形。

池波 萌子
（いけなみ もえこ）

聖蘭学院一年の水泳部所属。友希とは旧知の中で、彼女を尊敬し憧れている。物事にこだわらない天真爛漫な性格。推定Ｊカップの爆乳を持ち、アニメ声が特徴的。

第一章　豊満美教師の包茎しゃぶり

1

春の陽射しが緩やかに注ぎ込む部屋の中で、藤木達郎（ふじきたつろう）は額に浮かんだ汗を右手の甲で拭った。

「ふうっ。引越の荷物も、ようやく片づいたかな。あとは、窓にカーテンを取りつけるだけだ。それにしても、この部屋は西日がけっこう当たるんだなぁ」

時刻は午後三時を過ぎ、太陽は西へと傾いていたが、照明を必要としないほど部屋の中は明るい。

達郎はこの四月から高校二年に進級したが、父親の急な転勤で、ここF市に引っ越してきたばかりだった。

学校も転校し、明日から聖蘭（せいらん）学院の二年に編入することが決まっている。

引越の作業が間に合わず、一週間遅れの初登校となってしまったが、新しい学園生活に大きな期待感を抱かずにはいられなかった。

父親に転勤の話が出たとき、東京で一人暮らしをする選択もあったのだが、達郎はあえて違う土地での生活を希望したのである。

これまで通っていた開栄高校は中高一貫の男子校で、スポーツ系の部活が強く、特に水泳部は国体で何度も優勝経験がある、全国でも名高い強豪校だった。

幼い頃から泳ぐことが大好きだった達郎も入部していたが、実力こそ認められていたものの、元来の気の弱さが災いしたのか、顧問のスパルタ指導がどうにも肌に合わなかった。

結局、本来の実力が出せずに万年補欠扱い。達郎は悩んだあげく、水泳部を辞めたのだが、元部員たちの嫌味の言葉や嫌がらせを受けるようになり、学校を辞めたいとさえ考えるようになっていたのである。

それだけに父の転勤話は、達郎にとって、まさに渡りに船だった。

（今度の学校にも水泳部はあるみたいだし、きっとのんびりと部活動ができるはずだ）

そう思いながら、達郎は机の上に置かれている入部届の書類に目を留めた。

今日の午前中、母とともに聖蘭学院に赴き、入学にあたっての必要な書類や教科書はすべて受け取っている。

担任になる教諭との面会もあったが、そのときの話によると、聖蘭は生徒たちの部

活動を義務づけているようで、進学に力を入れている校風ということもあり、文化系のクラブに所属する生徒が多いらしい。

入部届の記入欄に、達郎はすでに自分の名前と『水泳部』の文字、そして入部の動機を書き込んでいた。

「聖蘭の水泳部って、いったいどんなクラブなんだろう。楽しみだな」

口元が綻んでしまうのは、好きな水泳に再び打ち込めるばかりではない。

聖蘭学院は二年前まで女子校で、少子化の影響から去年の春に共学へと変わったばかりだった。

当然女子生徒の数が圧倒的に多く、達郎の編入する二年の男子は十一人しかいないそうだ。むさ苦しい男子校から、女だらけの共学校に転校できるのだから、まさに掃きだめから花園へ移るような心境だった。

教室内に充満する甘酸っぱい香り、艶やかな黒髪に透き通るような白い肌。可憐な乙女たちの姿が脳裏に浮かんでしまう。条件反射のように股間がムズムズしてくると、達郎は両手で股ぐらをグッと押し込んだ。

中学一年で精通を迎えてから、留まらない性欲の昂りに、童貞少年は何度も苛まれてきた。

毎日のようにオナニーを繰り返し、日に六回射精したことさえある。
精子の作る量が他の男子よりも活発なのか、夢精をすることもしばしば。体育の時間や、ひどいときには歩いているときでさえペニスがパンツに擦れ、下着を精液で汚してしまった経験も一度や二度ではなかった。
自分は病気ではないかと、一時期はずいぶんと悩んだものだが、最近では仕方のないことだと半ばあきらめている。
（これまでは周りが男子ばかりだったから、異性に対する興味も妄想もひどかったんだ。毎日、女の子のことばかり考えてたもんな。今度の学校は女子が多いし、少しは精神的な余裕もできるんじゃないかな）
達郎の入る二年D組に、男子は一人もいないようだ。
大勢の女子に囲まれた図を想像しただけで、思わず口元がにやけてしまう。
「あ、いけない。早くカーテンをつけないと」
床に座っていた達郎がカーテンを手に立ちあがった瞬間、偶然にも、窓からとなりの家の部屋が覗き見えた。
（あっ!?）
人影が揺らめいたと思った直後、そこには一人の少女が立ち、カーテンも閉めずに、

今まさに服を脱ごうとしている。ブレザーとソックスはすでに脱いでいたが、赤いチェックのプリーツスカートは紛れもなく聖蘭学院の制服だった。
学校の授業を終え、帰宅したばかりなのだろう。
背中のほうまで垂れた黒髪の少女は、やや半身の体勢で後ろを向いているため、達郎の存在にはまったく気づいていないようだ。
(そうか。引越の荷物は午前中にすべて運び込んじゃったし、僕の部屋は照明をつけていない。彼女は、隣人が引っ越してきたことにまだ気づいていないんだ)
どう考えても、うら若き乙女がカーテンを開けたまま着替えをするわけがない。
達郎は泡を喰いながら、その場から立ち去ろうとしたものの、次の瞬間、全身の筋肉を硬直させた。
少女の足元にスカートがぱさりと落ち、すらりとした生脚がさらけ出される。両眼二・〇の視力が、瞬時にしてバンビのような長い脚を捉えた。
腰の位置が異様に高いため、抜群の脚線美を誇っているように思えたが、太腿や脹ら脛には適度な肉がついており、決して貧弱という印象は受けない。
シミの一点もない、白雪のようになめらかな素足を、達郎はぽかんとした顔つきで見つめるばかりだった。

少女がブラウスを脱ぎ捨てたと同時に、股間がズキンと脈動を打つ。生まれて初めて目にした同世代の少女の下着姿に、心臓の鼓動が高らかに鳴り響いた。

小高いヒップの盛りあがりはもちろん、上下ともお揃いの純白のブラジャーとパンティが、童貞少年の目を強烈に射貫く。

なだらかな背中から引き締まったウエスト、そこから急カーブを描くヒップの稜線、そして腰回りから太腿へと続く緩やかなスロープが何とも心地いい曲線を描いている。

少女は、何かスポーツをしているのだろうか。ウエストのあたりによけいな贅肉はいっさい付いておらず、ツンと上を向いた双臀に清楚なコットンパンティがぴっちりと張りついている。

穢れなき無垢なエロチシズムを感じた達郎は、無意識のうちに股間へと右手を伸ばしていた。

ペニスは完全勃起を示し、パンツの中で猛り狂っている。屹立を握り込んでいるだけで、すぐに射精してしまいそうだ。

思わず放出願望にとらわれた達郎だったが、少女が両手を背中に回してブラジャーのホックを外すと、鼻から荒い息をぶわっと吐き出した。

（えっ？　ブラを外すの？）

下着姿の状態で普段着に着替えるだろうと考えていただけに、期待感が一気に込みあげる。ホックを外すパチンという音が、ここまで聞こえてくるようだ。

少女がブラジャーを肩から滑らせるようにして取り外した瞬間、達郎は脇からお椀のような形をした乳房の輪郭をはっきりと捉えた。

それはひと際抜けるような白さを放っており、ふるふると小刻みに揺れ、先端の桜色の尖りさえ微かに覗き見える。真正面から見られないのが、何とも口惜しい。

美少女はブラジャーをベッドの上に放り投げると、今度はやや前屈みになり、パンティの上縁に両指を添えた。

「う、嘘っ⁉」

目が大きく見開き、意識せずとも驚愕の声が出てしまう。

柔らかそうな布地が、皺を作りながらゆっくりと下ろされ、もぎたての桃のようなヒップが徐々に剥き出しにされる。

つるりとした形のいい臀部が晒されると、達郎は知らずしらずのうちに窓際まで歩み寄っていった。

弾力感いっぱいのヒップは、肌の表面がよりいっそうなめらかで、美しい球体を描いている。ふっくらとした膨らみ、臀裂の狭間を見ているだけで、なぜこんなに胸が

妖しく騒ぐのだろう。
少女は片足ずつあげ、パンティを足首から抜き取っていった。
達郎の真正面に佇む彼女は、まさに一糸纏わぬ全裸状態。瑞々しい肢体を、これでもかと見せつけている。
カラスの濡れ羽のような艶を放つ黒髪、グラビアアイドルにも負けないプロポーション。いやが上にも、類い希なる美少女を想像してしまう。
カーテンを片手にしたまま、達郎はぐぐっと身を乗りだした。
美しい裸体を、瞼の裏に焼きつけておきたい。そして今夜、家人が寝静まってから究極のオナニーに耽りたい。
引越初日の隣人からの思わぬプレゼントに、右手の下の逸物も熱い昂りを訴える。
(あぁ、やばい。このまま出ちゃいそうだよ)
尿管を引き絞るようにペニスを鷲掴んだ直後、少女はベッドの上に置いてあった紙袋に手を伸ばした。
中から取り出したのは黒い布地で、ビニール袋に入っているところを見ると、おニューの服を購入したばかりなのかもしれない。
彼女はおそらく、着心地具合を確かめるつもりなのだろうが、それならなぜ裸にな

る必要があるのか。少女が服を両手で目の前に掲げた瞬間、達郎は目をひんむいた。
（あっ！　競泳水着だ）
サイドに白いラインが入っただけのシンプルな黒水着は、股間のあたりがややハイレグぎみで、生地もかなり薄そうだ。
聖蘭学院は屋内プールを使用しており、彼女がこの時期に水着を手にしているということは、もしかすると水泳部に所属しているのかもしれない。
達郎がそう考えた瞬間、予期せぬ事態が起こった。
少女が身体を回転させ、突然真正面を向いたのである。水着に向けられていた眼差しが、一瞬にして達郎へと注がれる。
（あっ！　かわいい!!）
アーモンド形の目に漆黒の瞳、小さな鼻にふっくらとした桃色の唇。見目麗しい美少女に心臓をドキリとさせたものの、達郎の視線はすぐさま美少女のバストと股間に移っていた。
きれいな半球形の乳房、桜色の乳首はもちろんのこと、こんもりとした恥丘の膨らみには楚々とした薄い翳りがはっきりと見て取れる。
二人はしばしのあいだ石のように固まっていたが、その時間はほんの二、三秒だっ

たのかもしれない。
片や全裸状態、片や覗きをしながら右手で股間をまさぐっているのだから、達郎と美少女の出逢いは、まさに突拍子もないと言える状況だった。
少女の頬がみるみるうちに赤く染まり、口元が小刻みに痙攣する。達郎のいる場所まで聞こえてきそうな悲鳴をあげたあと、カーテンが激しい勢いで閉められた。
「あ……あ。どうしよう」
ようやく我に返り、慌てて股間から右手を離しても時すでに遅し。達郎は呆然と、その場に立ち竦むことしかできなかった。

2

翌朝、達郎は早起きし、授業が始まる一時間前に聖蘭学院へと向かった。
自宅から学校までは、バス通学でおよそ二十分ほどかかる。もちろんこんなに早く家を出る必要はないのだが、達郎はバスの停留所で美少女と顔を合わせることを怖れたのである。
昨夜は両親とともに隣家へ挨拶に行く予定だったが、達郎は引越作業の疲れを理由

に頑なに拒否した。
結局、父と母だけで挨拶に向かったものの、美少女から覗き行為を咎められるのではないか、まさに生きた心地がしなかった。
両親がにこやかな顔つきで自宅に戻ってきたときは、どれだけホッとしたことだろう。
見ず知らずの若い男に、脱衣シーンばかりか、ヌードまで見られたのである。
うら若き乙女からすれば、死ぬほど恥ずかしかったろうし、憤怒の情を覚える出来事だったに違いない。
「ものすごい、かわいい娘さんだったな」
「ホントに。おっとりしていて、性格も良さそうだし。達郎と同じ学校、同じ学年だから、仲良くしてもらったら助かるわ」
「そ、そんなにかわいい子なの？」
安心感を得た達郎は、平静を装いながら、遠回しに美少女の情報を聞き出した。
名前は内田美久、年齢は十六歳。
やはり聖蘭の水泳部に所属しているらしく、両親は共働きらしい。父親のほうはまだ帰宅しておらず、出迎えてくれたのは美久と母親の二人だけとのことだった。

少女の帰宅時に両親は家にいなかったようで、彼女が達郎たちの引越にまったく気づかなかったのも道理である。

美久は二年C組で、達郎と同じクラスでないことだけがせめてもの救いだった。

（でも……水泳部に入ったら、顔を合わせないというわけにはいかないよな）

達郎の両親の前では遠慮したのだろうが、面と向かい合えば、非難の言葉を浴びせてくることも十分考えられる。

（せっかく、のんびりと水泳を楽しめるかと思ったのに。こりゃ前途多難だな）

達郎は小さな溜息を洩らしながら、聖蘭学院行きのバスに乗り込んだ。

その日は初登校ということで、達郎は緊張の一日を過ごした。

朝のホームルーム時に自己紹介した際、クラスの女生徒たちの視線を一斉に浴びたときの恐怖は忘れることができない。まるで自分が、さらし者にされているかのようだった。

教室内に男子が一人だけしかいないのだから、注目が集まるのは仕方のないことなのだが、さすがに女ばかりだと萎縮してしまう。それでも休み時間には数人の女生徒たちが話しかけてくれ、放課後にも達郎の周りには女の子たちの輪ができていた。

もちろんこんなことは初めての経験で、一気にモテ男になった錯覚に陥ってしまう。緊張もようやく和らいだ頃、達郎は女生徒たちに別れを告げ、一人屋内プールへと向かった。

（ああ、やっぱり転校してよかったな。女の子もみんな優しく接してくれるし……。でも、まだ安心はできないぞ）

達郎はこの日の放課後、水泳部の練習風景を見学し、その足で顧問に入部届を提出する予定でいた。

当然のことだが、水泳部に所属している美久との再会が待ち受けているのだ。

日にちを改めようとも考えたのだが、彼女がとなりの家に住んでいる以上、いずれは顔を合わせなければならないし、もちろん他のクラブへ入部するつもりもいっさいなかった。

（たまたま偶然見ちゃっただけなんだから、そのことをちゃんと説明して謝れば、きっと許してくれるはずだよ）

そう思いながらも、自らの股間をいじくっていた光景を思い出しただけで、どうにも気が重たくなる。

（女の子たちと話してたんで、ちょっと遅くなっちゃったな。もう練習は始まってる

んだろうか。とりあえず今日のところは、顧問の先生に入部届だけを渡して……帰ろうかな）

屋内プールの真横には本校舎とは別に記念館が設置され、一階には講堂、二階が体育会系クラブの部室、そして三階には教員用の講師室や更衣室が完備されている。

達郎は水泳部の見学をあきらめ、記念館の三階にある講師室へと向かった。

水泳部の顧問は、畑山響子（はたやまきょうこ）という二十八歳の体育教師が務めているようだ。

いったい、どんな女性なのだろうか。中学時代の水泳部の顧問は鬼のような男性教師だったので、女というだけでつい甘い想像をしてしまう。

（担任の話だと、国体に出場したほどの実力者だって言ってたけど、優しい先生だといいな）

達郎は女教師のイメージをあれこれと妄想しながら、記念館の一階から三階に向かう階段を昇っていったが、二階の踊り場まで来た直後、突然身体に凄まじい衝撃を受けた。

「あっ!!」

上から猛スピードで下りてきた人影と派手にぶつかり、もんどり打って仰向けに倒れ込む。視界の隅に映った人間は、ブラウンのブレザーに紺色のチェックズボンを穿

いており、紛れもなく聖蘭学院の男子生徒が着用する制服だった。
「あつっ！」
達郎は肩と腰の痛みに口元を歪めたが、男子は謝罪どころか振り返りもせず、逃げるように階段を駆け下りていく。
「な、何だよ……あいつ。ひどいなぁ」
腰を擦りながら立ちあがった達郎は、ムッとしながらも、踊り場に落ちている布きれに視線を留めた。
（な、何だろ？）
身を屈めて拾いあげてみると、それはあろうことか、純白のコットンパンティだった。フロントの上部に小さなリボンをあしらった、いかにも女子高生あたりが穿くかわいらしい下着だ。
「な、何でこんなものが⁉」
パンティはまだ人肌の温もりを残しているようで、鼻をそっと寄せれば、微かに甘酸っぱい香りが立ち上っている。
今しがた、階段を下りていった男子生徒が落としていったのだろうか。
「ひょっとして、男じゃなくて女だったのかな。いや、そんなはずはない。確かにズ

ボンを穿いていた」
小首を傾げた瞬間、二階の廊下のほうからバタバタと人の足音が聞こえ、達郎は反射的に下着を後ろ手に隠した。
「いたわ！　こっちよ」
「えっ⁉」
紺色のジャージを着た女の子が声を張りあげ、そのあとに現れた三人の女生徒とともに階段を駆け下りてくる。達郎は壁を背に足を竦めるばかりだったが、そのうちの一人の顔を見た瞬間、心の中で驚きの悲鳴をあげた。
（あっ！　あの子だ）
一番後ろに立つ少女は、間違いなくとなりの家に住む内田美久だった。
すると彼女たちは、水泳部員なのだろうか。
間近で見ると、四人の中では圧倒的な美少女ぶりを誇っている。
達郎は自然と美しい裸体を脳裏に甦らせたが、美久の突き刺すような視線に気づき、頭にカッと血を昇らせた。
「何やってたの？」
最初に声を張りあげた女の子が詰問してきても、いったい何を言っているのか、さ

っぱりわからない。達郎はおどおどしながら、震える唇を微かに開いた。
「な、何のことでしょう？」
「とぼけないでよ！　私たちの部室で、何をやってたのかって聞いてるの！」
「部室って……」
「私が忘れ物を取りに帰ったら、あなた部室の中にいたでしょ！」
女の子の言葉を受け、階段の踊り場に落ちていたパンティの謎がようやく解ける。
（あ、あいつ！　ひょっとして、部室に侵入して下着を盗んだのか⁉）
別の女生徒の視線が、達郎の背後に隠された両手に向けられた。
「後ろに何を隠してるの？」
「ぼ……僕じゃありません。ホントです。今しがた、男子生徒が上から凄いスピードで下りてきて、僕とぶつかったんです」
「いいから見せなさいよ！」
二人の女性部員から両肩をがっちりと押さえられ、後ろに回した手を強引に引っ張られる。
「手を広げて！」
握り締めた拳を広げさせられると、小さく丸まったパンティが姿を現した。

「わ……私の……下着」
美久が蚊の鳴くような声で呟き、驚きの表情とともに両手で口を覆う。
（えっ！　彼女のパンティ!?）
何という偶然なのか。昨日はオールヌードを目撃し、今日は美少女の穿く生パンティを手にしていようとは。
「いやらしい！　下着を盗みに入ったのね」
「ち、違います！　ですから、これはぶつかってきた男が落としていったものなんです。何だろうと思って拾いあげたら、君たちが現れたんです。信じてください！」
「何言ってるの。怪しい男は、あなたしかいないじゃない！」
手のひらからパンティをひったくられた達郎は、激しい動悸とともに、汗で全身ずぶ濡れ状態だった。
転校初日早々、今まさに下着泥棒の汚名を着せられようとしているのだ。
親に報告されるどころか、下手をしたら退学処分さえあり得る。
「本当です。信じて！」
必死の形相で訴えると、それまで静観していた背の高い女生徒が初めて口を開いた。
「ねえ、犯人の顔を見たの？　ホントにこの子だったの？」

激高している女性部員が眉を顰め、達郎の顔をじっと見つめてくる。
「顔は……見てないです。部室に入ったとき、犯人は手で顔を隠して、私を突き飛ばして出ていったんですから。部長は見なかったんですか？」
大人びた顔つきの女生徒は、どうやら水泳部の部長のようだ。達郎は藁にも縋るような目で、部長と呼ばれた女性部員を見つめた。
「私たちは反対側の階段のところで、あなたを待ってたから。悲鳴を聞いて駆けつけたときには、怪しい人なんて誰もいなかったわ。きっと階段を駆け下りていったあとだったのね」
「絶対こいつよ。髪型だって姿格好だって、そっくりだもん！」
「ち、違います！　僕じゃないです!!」
思わず美久に視線を送ると、美少女はまだ放心状態のまま立ち尽くしている。
「それじゃ、あなたはなぜこんな場所にいたの？　この学校の男子は三十人ほどしかいないし、こんな時間に記念館にいるなんて不自然だわ」
部長が問いただしてくると、達郎はブレザーのポケットに手を入れながら答えた。
「僕、実は今日転校してきたばかりで、顧問の先生にクラブへの入部届を出しにきたんです」

そう言いながら、入部届の書類を見せる。美久以外の三人の女性部員は、みるみるうちに目を見開いていった。
「あ、あなた、水泳部に入部する気？」
「はい。二年D組、藤木達郎です。よろしくお願いします！」
やましいことは、何一つしていないのだ。部長のおかげで冷静さを取り戻した達郎は、胸を張って自己紹介した。
女性部員たちは顔を見合わせ、複雑そうな顔をしている。
とにもかくにも、この場所から一刻も早く離れたい。達郎は、部長に講師室の場所を尋ねた。
「講師室は三階のどこですか？　僕、まだこの学校のことがよくわからなくて」
「この階段を昇って、反対側の一番端の部屋よ。響子先生はいつも練習が始まってから姿を現すから、まだ講師室にいると思うわ」
いくら何でも、右も左もわからない転校初日に部室へと忍び込み、女生徒の下着を盗みだすような男子生徒などいないはずだ。
ただ美久だけは眉尻を吊りあげ、達郎の顔をキッと睨みつけていた。
昨日の覗きまがいの行為を知っているだけに、下着泥棒の疑いを拭いきれないのだ

ろう。
「ありがとうございます」
ペコリと頭を下げ、その場から離れようとすると、部長が最後に念を押してくる。
「待って。言っておくけど、まだ完全に君の疑いが晴れたというわけじゃないからね。もし水泳部に入部するんだったら、そのことだけは頭に入れておいて」
「は……はい」
達郎は苦々しい顔つきをしながらも、いまだ憤然としている美久をチラリと見やり、足早に三階への階段を駆け昇っていった。

3

部長の言葉どおり、三階の角に、『畑山響子』のネームプレートが掛けられた体育講師室があった。
入部届を提出する直前に、下着泥棒の濡れ衣を着せられるとは何とも幸先が悪い。
いずれにしても、パンティ泥棒の件は、達郎の口から顧問に話しておいたほうがいいだろう。

（顧問の先生は女だし、僕の言うことを信じてくれるかな。まったく……とんだとばっちりだよ）

達郎は緊張に身を引き締めると、入部届を片手に部屋の扉をノックした。

しばし待ち受けるも、室内からの返答はいっさいない。

（おかしいな。トイレにでも行ってるのかな）

達郎はもう一度ノックすると、ドアノブをゆっくり回しながら声をかけた。

「すみません。転校してきた藤木と言います。入部届を出しに来たんですが……」

講師室には正面に大きな机と椅子、両脇にスティール製の本棚が置かれ、棚にはスポーツ関係の本がぎっしりと並べられている。

「失礼します」

達郎はいぶかしみながら室内に足を踏み入れ、あたりをキョロキョロと見渡した。

響子はやはり不在のようだが、左側面の壁にある扉が大きく開け放たれている。達郎は何の疑問も持たず、となりの部屋へと歩み寄っていった。

「すみません、誰かいませんか？」

小声で問いかけるも、どこからも返事がない。

（ここは……何の部屋なんだろう？）

床にはブルーの薄い絨毯が敷かれ、真っ白な壁と明るい照明が目に飛び込んでくる。二、三歩進み、洗面台とスティール製のロッカーを確認した達郎は、一瞬にして顔色を変えた。

（あっ、やばい。ここは更衣室だ！）

甘いコロンの匂いが、鼻先に香ってくる。女教師は、おそらくここで着替えをしていたに違いない。

下着泥棒の一件のあとに更衣室への無断侵入では、あまりにも状況が悪すぎる。

変態少年のレッテルを貼られかねないと考えた達郎は、慌てて踵を返したものの、部屋の片隅から漂うただならぬ気配に足を止めた。

（な、何だ？）

更衣室の奥のほうから、子供の啜り泣くような声が微かに聞こえてくる。耳を澄ますと、それは紛れもなく女の嗚咽だった。

「う、う……うンっ。いやっ」

最初は泣いているのかと思ったのだが、「いやっ」という言葉は、どう考えてもおかしい。

（ひ、ひょっとして……さっきの下着泥棒が逆方向の階段から舞い戻ってきて、先生

をレイプしているんじゃ!?　だとしたら、助けないと）
その可能性は限りなく低かったが、想像力豊かな少年の妄想は広がるばかりだ。
達郎は拳を握り締めながら、真相を探るべく、ゆっくりと歩を進めた。
奥の部屋はシャワー室なのだろうか。
着替えやシャワーを浴びる際、普通の女性なら内鍵ぐらいはかけるはずなのだが、響子はかなりズボラな性格なのか、またもや扉が半分ほど開いている。
（二年前まで女子校だったから、危機管理が薄いのかも）
シャワー室に近づくにつれ、達郎の警戒心は徐々に邪な思いへと変化していった。
中から聞こえてくる声には、どこか甘い余韻が含まれ、男の声など少しも聞こえてこなかったからである。
「あンっ……うふンっ。いやンっ」
女の生々しいよがり声が耳に飛び込んでくると、達郎は早くも股間の逸物を反応させた。
（う、嘘だろ……ま、まさか）
脳裏に浮かんだ光景は、女教師のオナニー姿そのものだった。
何にしても、ここは出直したほうがよさそうだ。そう考えた達郎だったが、低いモ

ーター音が鳴り響いてくると、両肩をビクンと震わせながら全身を硬直させた。
（これは……いったい何の音だ？）
童貞少年の、旺盛な好奇心がくすぐられる。いけないと思いながらも、足が自然と前へ前へと進んでしまう。
（ひと目、ひと目だけ……）
生唾を呑み込み、扉の隙間から中を覗き込んだ達郎は、あまりの凄まじいシーンに大声をあげそうになった。
四畳ほどのシャワー室の中央に置かれた長椅子に、一人の女性が全裸で跨がり、これ以上ないというほどの大股を開いている。
股間の中央には黒光りした太い棒のようなモノが埋め込まれ、そこからモーター音が鳴り響いていた。
（あ、あれはバイブ⁉）
校内のシャワー室で、女教師がアダルトグッズを使用してオナニーをしている。
その事実がいまだ信じられず、達郎はただ惚けた表情で、眼前の光景を注視するばかりだった。
ややウェーブのかかった栗色のセミロングに切れ長の瞳、紅色のルージュに彩られ

た肉厚の唇が妖しく濡れ光っている。
成熟した色気をむんむんと発しているこの女性が、水泳部顧問の畑山響子なのだろうか。だが今の達郎の関心は、彼女のプロフィールよりも、くねる淫らな肢体に向けられていた。
ゆっさゆっさと派手に揺れるメロンのような大きな乳房は、ゆうにFカップ以上はあるのではないだろうか。
どっしりとした腰回り、そして逞しいと思えるほどの太腿の内股は、プディングのようにぷるぷると震えていた。
(あぁ、すごい。おマ○コが丸見えだ!)
女性は豪奢な肉体を目いっぱい駆使し、右手で淫裂に嵌まり込んだバイブを抜き差しし、腰をダイナミックに回転させている。
生まれて初めて目にした女の秘唇に、達郎の心臓は破裂しそうな鼓動を打った。
肥厚した二枚の唇は外側に大きく捲れあがり、バイブをしっかりと咥え込んでいる。
右手で遮られているためにはっきりとは見えなかったが、クチュクチュという淫らな摩擦音が響き、愛液塗れの張形は照明を反射してヌラヌラと照り輝いていた。
こんもりと盛りあがった恥丘の膨らみは、全体が桜色に染まり、鶏の鶏冠のように

突き出た陰核らしきものまで見て取れる。
熱化した女の媚臭が、達郎の立つ位置まで匂ってくるようだ。
「はあ、はあ、はあ」
女性は小さな喘ぎ声をあげ続け、全身に汗の皮膜をうっすらと纏わせている。
手の動きがピッチをあげていくと、達郎も無意識のうちに右手を股間に伸ばした。
すでにペニスはズボンの中で完全勃起を示し、先走りの液が溢れているのか、ヌルッとした感触さえ走っている。
昨日の美少女のオールヌードも生唾ものだったが、大人の女性のオナニー姿はあまりにも生々しくて刺激的だった。
（あぁ、何ていやらしいんだ。あんな太いバイブを、奥までずっぷりと入れちゃって。あそこに、僕のおチンチンを入れてみたいよぉ）
牡の生殖本能をすっかり刺激され、早くもペニスが放出に向けての熱い脈動を訴える。女性は右手でバイブをスライドさせながら、今度は左手を股間に伸ばした。
「はぁぁぁぁっ！　気持ちいい！」
しなやかな指先は、どうやら頂上の敏感な尖りをまさぐっているようだ。
グラマラスな肉体がビクンと跳ねあがり、女性の容貌が徐々に切なげな表情へと変

わっていく。淫裂の縦割れは真っ赤に充血し、大量の花蜜でぬかるんでいた。
女性は深紅色の内粘膜まで露出させ、なおもバイブの動きを速めている。
（あぁっ。おマ〇コが、とろとろに蕩けてるみたいだ。見たい、もっと近くに行ってはっきりと見たいよぉ）
扇情的な光景の連続に、達郎は頭をボーッとさせながら両肩で喘いだ。
勃起がじんじんと疼き、堪えきれない情欲が内から溢れ出てくる。射精感を自制しようと、右手で肉棒を強く握り込んでも、そんなものはまったく役に立たない。
左手にあった入部届は、すでにくちゃくちゃに丸められた状態になっていた。
「はぁぁぁぅンっ！　イッちゃう、イッちゃいそうぉぉっ」
女性は腰をグラインドさせることで快感を増幅させ、絶頂への扉を開け放とうとしているようだ。尾を引くようなよがり声をあげ、股間の肉割れからグチュグチュンと、濁音混じりの猥音を間断なく響かせている。秘裂から愛液の飛沫をあげ、それは長椅子ばかりか、タイルの上にまで滴るような凄まじさだった。
女性の両足は今や百八十度まで開き、ヒップがツンツンと椅子から何度も浮きあがる。
（や、やばい！　ぼ、僕もイッちゃいそうだよ）

達郎は右手に加え、左手をズボンの膨らみに添えたものの、それは単にペニスに新たな刺激を与えただけだった。
「イクっ！　イクぅぅぅぅぅうっ!!」
女性がエクスタシーの嬌声を轟かせたと同時に、稲妻が脳幹を貫き、目の前が真っ白になる。
腰をビクビクと震わせた達郎は、何と下着の中に大量の精液を放出していた。

4

総身が震えるような放出感に、達郎は自分が今いる場所さえ忘れ、しばらく陶然としていた。
昨日はとなりの美少女に覗き見がバレてしまったこと、そして初登校の緊張感からオナニーを控えたため、性的欲求もふだんより強かったようだ。
それでもパンツの中に溜まった精液が冷えてくると、達郎はすぐさま現実へと引き戻された。
（あぁ、やばい！　こんな所で射精しちゃったよぉ）

一歩でも動いたら、パンツから滲み出した精液が足元まで垂れてきそうだ。
やや前屈みの姿勢で股間を両手で押さえ、扉の前からそっと離れようとした達郎だったが、その直後、半開きだったシャワー室の扉が大きく開かれた。
「誰っ！」
「ひっ！」
いつの間にかバスタオルを身体に巻いた響子が、腰に両手を当て、仁王立ちの状態で佇んでいる。
「誰なの！　名前を言いなさい」
「はい！　あの……今日転校してきた、二年の藤木達郎と言います」
慌て戦いた達郎は、背筋をピンと伸ばして答えたものの、響子に右手を掴まれ、強引にシャワー室の中へと連れ込まれた。
扉が閉められ、恐怖心から顔色が青ざめていく。
響子は先ほどとは打って変わり、目尻を吊りあげ、射るような厳しい眼差しを向けていた。
「いい度胸ね。転校早々、女教師のシャワー室を覗きに来るなんて」
「ち、違います。水泳部に入りたいと思いまして、それで入部届を出しにきたんです」

「だったら、講師室で待ってればいいでしょ？」
「ご、ごめんなさい。声はかけたんですけど、こちら側のドアが開いていたので、つ
いうっかり……」
「いつからいたの？」
「え？」
「いつからいたのかって聞いてるの」
響子は、自慰行為を見られたのではないかということを気にしているようだ。
達郎は無意識のうちに、彼女が座っていた長椅子付近に目を向けた。
アダルトグッズは、どこにも見当たらない。どうやらシャワーカーテンの向こう側
に隠してあるようだが、達郎の行動は、女教師のオナニーシーンを目撃した事実を証
明するにあまりあるものだった。
「見たのね？」
「あ……あの」
響子の目がすっと細くなり、口元がひくひくと引き攣る。
「み、見てません！　何も見てません。本当です！」
背筋をゾクッとさせた達郎が申し開きをすると、女教師は視線を下方へと移した。

「何してるの？　変なとこ、押さえて。ちゃんと真っすぐに立ちなさい」
「は、そ、それは」
直立不動の体勢をとれば、大量の精液がズボンにまで滲み出てきそうだ。困惑する達郎を見た直後、響子は突然口角をあげながら言い放った。
「ふうん、出ちゃったんだ」
「そ……それは、あの……」
「いやらしい子ね。更衣室に侵入したうえに、覗きばかりか、射精までしちゃうなんて。学校側に報告するしかないかしら？」
「そ、それだけは勘弁してください！」
響子も校内ではしたない行為をしてしまったという弱みはあるのだろうが、更衣室での覗きのほうが圧倒的に分が悪い。しかも達郎はその直前、下着泥棒の疑惑まで受けているのだ。
偶然の災難が重なったこととはいえ、転校してきたばかりの生徒の言い分を、いったい誰が信じてくれるだろう。
「ど、どうかこのことは内緒にしてください！」
達郎が苦悶の表情を見せると、響子はようやく相好を崩した。

「そう。だったらあなたも、ここで見たことはすべて忘れるってことでいいのね」
「も、もちろんです。口が裂けても言いません」
「二人だけの約束よ」
「はいっ」
人生最大の危機は、何とか去ったようだ。
ホッと安堵して胸を撫で下ろした瞬間、響子はいきなり達郎のブレザーに手を伸ばしてきた。
「あ、あ。先生……何を？」
「あら、だってパンツの中に放出したままじゃ帰れないでしょ？　ここはシャワー室なんだし、ちゃんときれいにしてから帰りなさい」
「……でしたら、自分でしますから」
「いいのよ、遠慮しないで。これも口止めの分に入ってるんだから」
「……え？」
上着を脱がされ、今度はカチャカチャと音を立ててベルトが外されていく。
瞬時にして頭に血が昇り、自分の身に何が起こっているのか、すぐには理解できない。

美人教師のオナニー姿を目撃しただけでも夢のような出来事なのに、今度はその相手からズボンを下ろされ、今まさに恥部を晒そうとしているのだ。

ひょっとして響子は、達郎にも恥ずかしい思いをさせ、さらに二人のあいだの約束事を堅固なものにしようとしているのではないか。

いずれにしても、女教師のくっきりとした胸の谷間が視界に飛び込むと、萎靡しかけていたペニスはまたもや息を吹き返し、精液塗れのパンツの中でムクムクと体積を増していった。

響子は腰を落とし、ジッパーをゆっくりと引き下げていく。その瞬間、美しい弧を描く眉がピクリと動いた。

「やだっ、ホントに出しちゃったのね。パンツにシミができてるわよ。あぁ、すごい匂い」

前開きの社会の窓から、精液臭がプンプンと立ち上っているのだろう。響子は眉根を寄せながら、学生ズボンを足首まで一気に下ろす。

（あぁ、恥ずかしい、恥ずかしいよぉ）

思わず腰をくねらせる達郎だったが、羞恥地獄はまだまだ序章の段階にすぎなかった。

「あらっ。あなた、また勃起してるんじゃない？」
股間に視線を落とすと、ブリーフは確かに三角の頂を描いている。
ゆでダコのように顔を紅潮させた達郎は、激しい心臓の昂りに、もはやひと言も発することができなかった。
「ふふっ。じゃ、パンツ脱がせるわよ」
ウエストの上縁に、細長い指が添えられる。切れ長の目が、達郎の顔をじっと見据える。
下着が剥き下ろされた瞬間、ペニスはジャックナイフのように跳ねあがり、精液を扇状に翻しながら下腹を激しく打ちつけた。
（あぁぁっ!!）
響子が目を見張り、口を半開きにする。
淡い陰毛の狭間から生えている牡器官は、包皮こそ被っていたものの、自分の目から見ても不釣り合いなほど大きい。十八センチの巨根は、禍々しいほどの怒張ぶりを放ち、存在感を誇示するように脈動していた。
「嘘っ。す……すごいわ。何、このおチンチン。ワイシャツを捲って、もっとよく見せて」

「で、でも……」
「早く！」
言われるがまま、達郎がシャツの裾を両手でたくしあげると、響子は瞬きもせずに顔を近づけてくる。
ペニスは残滓塗れで、ヌルヌルの状態だ。達郎が口元を歪めた瞬間、女教師はいきなり右手で剛直を握り込んだ。
「あっ！」
甘美な性電流が、脊髄から脳幹へと駆け抜けていく。初めて異性に恥部を触られた感触は、自分の手とは比較にならないほど気持ちのいいものだった。
ふっくらとした指腹が肉胴にしっとりと張りつき、手のひらの温もりを男根に伝えてくる。
（あぁ、先生が、先生が僕のおチンチンを⁉）
達郎が驚愕の悲鳴をあげるなか、今度はペニスがグイッと響子の側へもっていかれた。
「カチカチだわ。それに太くて指が回らない。なんて大きなおチンチンなの」
響子の口元から剛直まで、わずか数センチ。熱い吐息が亀頭に吹きかかり、そのた

びに肉筒がしゃくりあげを繰り返した。
上唇を舌先でなぞりあげる女教師の、何と淫蕩な顔つきか。潤んだ瞳と濡れた唇が、セックスアピールをこれでもかと感じさせる。
たわわに実ったバストが上下に起伏する様を見る限り、彼女も性的な昂奮をしているのかもしれない。性衝動を一気に込みあげさせた達郎は、両肩で喘ぎながら期待感に胸を躍らせた。
(ひょ……ひょっとして、このままいくと、先生相手に童貞を捨てることになるかも)
年上の女性相手との初体験は、これまで何度も夢想してきたシチュエーションである。
内から込みあげるエネルギーは、そのまま若茎の躍動に取って代わったが、響子はとろんとした瞳に生気を漲らせると、指先で亀頭の先端を摘みあげた。
「あ、つぅ!」
バラ色の人差し指と親指が、有無を言わせず包皮を剥き下ろしていく。達郎はギョッとしながら咆哮した。
「痛い! 先生、痛いです」
「おチンチンの皮は、ちゃんと剥いておかなきゃダメなのよ。皮と亀頭のあいだに恥

垢が溜まって不潔でしょ？　それに今は精液だって」
苦痛に顔を歪める達郎を尻目に、響子は妖しい笑みを浮かべながら指先に力を込める。
「はひっ！」
包皮が横に張り出したえらでくるりと反転した瞬間、欲望の塊が噴火口へと突っ走ったが、達郎はすんでのところで堪えた。
捲れた皮が、雁首を強烈に締めつけていたせいもあるのかもしれない。張り詰めた宝冠部がジンジンと痺れ、思わず両目を閉じてしまう。
達郎は膝をくの字に折り曲げたまま、腰をプルプルと震わせるばかりだった。
「ほらっ、やっぱり皮の下にたくさん精液が溜まってたわ。でもピンク色でかわいいのね」
うっすらと目を開けると、亀頭は真っ赤に腫れあがり、どろりとした白濁がタイルの上に滴り落ちる。
おそらく響子は、達郎が童貞だと見透かしていることだろう。
（先生、次はどんなエッチなことしてくれるの？　僕、もう我慢できないよぉ）
放出願望にペニスの疼痛が拍車をかけ、達郎の昂奮は早くもレッドゾーンへと飛び

込んでいた。
「それにしても、ホントに大きいわぁ。信じられない」
美人教師に穴が空くほどペニスを凝視され、再び快美の嵐が下腹部に吹き荒れる。
響子はしばし剛直を眺めていたあと、躊躇うことなく先端部分に舌を這わせた。
「あ！」
下半身に、いまだかつて経験したことのない微電流が走り抜ける。それは敏感になっている部分が、むず痒くなるような不思議な感覚だった。
「はぁぁっ……あぁぁっ」
亀頭、鈴口、雁首、裏茎と、響子はやや上目遣いに、童貞少年の表情を探りながら、ゆっくりと舌をなぞらえる。達郎はそのたびに腰を跳ねあげ、嗚咽混じりの喘ぎ声をあげていった。
（せ……先生が僕のおチンチンを、おチンチンを舐めてる!?）
紅色の長い舌が生き物のようにくねり、胴体に巻きついてくる。上下の唇が開き、その隙間から大量の唾液が垂れてくる。透明な粘液がペニスにまとわりついた瞬間、節ばった逸物は女教師の喉深く、一気に呑み込まれていった。
「は、ひぃぃぃぃっ！」

頭の先から足の爪先まで、青白い電撃が貫いていく。響子は口の中でも唾液をまぶし、柔らかい口腔粘膜でクチュクチュと陰茎を揉み込んでいった。

ペニスを源泉に浸らせているような温かさが、陰茎全体にじわっと広がっていく。手のひらで握られていたときよりも、数倍も強烈な快美だ。

（先生がフェラチオを⁉　フェラチオをしてくれてる！　な、何て気持ちいいんだ。おチンチンが蕩けそうだよ）

精液塗れで強烈な匂いを発しているペニスを、まさか口に含んでくれるとは夢にも思わなかった。

達郎にとって、響子の振る舞いはまさに衝撃的なものだったのである。

徐々に迫り来る巨大な快感に不安さえ覚えながらも、至高の放出に向けて白濁の弾丸が発射台に装填される。

できれば、この快楽をもっと持続させたい。滅多にないこのチャンスを、ゆっくりと心ゆくまで堪能したい。

「先生、ぼ……僕っ」

絞り出すように発した哀願は、次の行為によってもろくも崩れ去った。

頬を窄めた響子が、顔を上下にスライドさせはじめたのである。

「あ、あぁぁぁぁぁぁっ！」
達郎は顔をあげ、虚ろな視線を宙に舞わせた。
膝がガクガクと震え、このまま腰が抜けてしまいそうだ。
（はぁっ、すごい、すごいよ！　先生の唇が捲れあがって、僕のおチンチンをしごきまくってる!!）
怒張が根元まで呑み込まれると、ペニス全体が蕩けそうになり、胴体が引き抜かれるときには、雁首が肉厚の唇に擦りあげられ、小さな快感電流が腰部を何度も走り抜けていく。
唾液で濡れた唇も悩ましかったが、抽送が繰り返されるたびに、響子の口内からクチュ、クチュと鳴り響いてくる淫猥な音も、童貞少年の性感を沸騰させた。
「あ、先生！　僕、も、もうイッちゃいそうです」
泣き顔で放出の瞬間を訴えた直後から、下半身にやるせなくも甘ったるい感覚がどんどん広がっていく。
達郎の言葉を合図としたかのように、響子は口から怒張を抜き取ると、今度は右手でペニスをしごきはじめた。
唾液をまぶされた怒張は、水飴のようにてらてらと照り輝いている。響子は再び男

根に唾を吹きかけると、手首のスナップを目いっぱい利かせ、力強いピストンを繰り返していった。
「あ……あ……あ」
「気持ちいい？」
「あぁ、気持ちいい。気持ちいいです！」
「ふふ、もっと気持ちよくしてあげる」
響子が左手でバスタオルの結び目を解き、今にもこぼれ落ちそうな乳房をまろび出させる。
（せ、先生のおっぱいだ！　上下左右にぶるんぶるん揺れてる!!）
響子は首をやや傾げ、微笑を湛えながら童貞少年の切な顔を注視している。しかも舌を口からちょこんと突き出し、敏感な雁首や鈴口を掃き嬲る念の入れようだ。
サディスティックで挑発的な眼差しに、達郎の限界は頂点を極めていった。
「先生、出ちゃう、出ちゃいます！」
「いいわよ、出して。スケベ汁いっぱい出すとこ、先生が全部見ててあげる」
女教師の口から次々と放たれる淫語責めに、達郎は歯を剥き出しにし、上半身を反り返らせた。

「イクっ！　イクぅぅぅぅぅう!!」
鈴割れから、精液の第一陣が堰を切ったように迸る。それは大きな放物線を描き、響子の豊満なバストを派手に打ちつけた。
「きゃっ！」
第二陣はさらに大きな放物線を描き、女教師の頭を飛び越えんばかりの勢いで放出される。引き続き第三陣、第四陣の精液が宙を舞い、響子は驚愕の声をあげながら、間欠を繰り返す肉筒を怒濤のようにしごき続けた。
「すごい、すごいわぁ！　何これ、まだ出る！」
およそ十回近くは脈動しただろうか。
噴出の勢いがようやく衰えてくると、響子は根元から亀頭に向かって、皮を鞣すように肉胴をゆっくりと搾りあげる。尿管内の残滓がひと際高く跳ねあがると、達郎はそのまま膝から崩れ落ちていった。
「はあ、はあ、はあ」
「いやだわ、胸がベトベト。またシャワーを浴びなきゃ」
すっくと立ちあがった響子の瞳が、シャワー室の入り口に向けられる。そこには達郎が握り締めていた入部届が、しわくちゃの状態で転がっていた。

達郎がシャワー室に引っ張り込まれた際、手からポロリとこぼれ落ちたものだ。
何気なく拾いあげ、書類を広げた響子の目が徐々に真剣味を帯びていく。
「あ、あなた！　開栄高校の水泳部にいたの!?」
「ふぁ、ふぁい」
「ちょっと、シャンとしなさい！」
お尻をバチンと叩かれても、達郎はタイルの上に横たわったまま、いまだ恍惚の世界を彷徨っていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

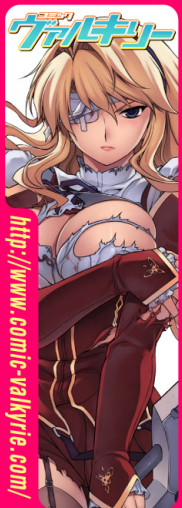
※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁でではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!